第 10 回日本光カード医学会論文集、13、1999 年
特別講演

「移植医療をめぐる問題点」－医学と社会の対話について

藤堂　省

北海道大学医学部第１外科

医学とは疾病の予防や治療を研究する学問であり、医療はその結果を実践すること及びその実践を支えるシステムと言えます。これまでの医療の進歩は主に経験に支えられた緩やかなものでしたが、20 世紀後半に入って自然科学の急速な発展により様々な問題を社会に提起するに至りました。クローン技術、遺伝子治療、再生医学などがそうであり、又、近年とみに関心を集めている脳死臓器移植もその一つです。

欧米では、臓器移植は一般の外科手術と同じように日常診療の一つとして現在行われています。しかし、そのためには 40 年近くの年月が必要でした。例えば肝臓移植を例にとると、1950 年代半ばにその有用性が実験的に示唆され、 1962 年世界最初の肝臓移植が行われました。 1970 年代末までは免疫抑制剤の効果が不十分なために実験的手術として見なされていましたが、 1978 年に新しい免疫抑制剤シクロスポリンが臨床に導入され、1983 年には、肝臓}移植は治療的手術として社会の容認を受けるに至りました。

今から 15 年余り前のことに過ぎません。現在肝臓移植は欧米で７～ 8,000 例の手術が行われています。また、アジアでも韓国、台湾、シンガポール、タイ、フィリピン等色々な国で行われるに至りました。この肝臓移植の進歩を支えたものは、免疫抑制剤や手術法、感染症の予防法等々医学の進歩が重要な貢献をしましたが、それと同時に肝臓移植をより一般的な治療法として普及させるために、社会もまた様々なシステムを作ってきました。人の死としての脳死の容認、臓器提供のための社会運動、臓器移植における経済的支援、移植臓器の公平な配分を支えるための組織の構築等であります。

他方、我が国は 30 年前の心臓移植の不幸な経験から脳死や臓器移植に対する取り組みが遅れ、脳死法案が成立したのはわずか 2 年前のことに過ぎません。今年に入って、4 例の脳死下での臓器移植が行われましたが、救急医療、脳死判定、臓器配分、運搬、移植施設、患者の選択法等の問題が明らかになりました。又、医療に関わるもののみならず、プライバシーと情報の公開という重要な問題を提起しました。いわば、 2,30 年前に欧米が医学の進歩によって開発された新しい技術を容認するために社会もまた大きな変革を余儀なくされたことを今我が国が経験しようとしています。本公演では、移植医療を支える問題を医学と医療の二つの面から論じ、且つ社会がどのように対応するべきかを欧米にその例をとり紹介したいと思います。